

# 1800 年前後の文学作品における大学生像について

小崎 肇

## 0. はじめに

1800 年を前後する数十年は、大学生という存在がドイツ語圏の歴史上である種の主導的役割を果たす時期である。ハレ大学から始まりベルリン大学にいたるプロイセンでの大学の近代化改革、対フランス解放戦争における義勇兵としての大学生の参戦、反動期におけるブルシェンシャフト運動の開始。それまで粗野、野蛮というイメージで一定の存在感をもって語られていた大学生は、にわかに社会全体に影響を及ぼす集団として認識されるようになる。

しかし、この時代の文学作品における大学生をテーマとした研究は極めて少ない。<sup>1</sup>それ以前の十八世紀なかばまで、ピカレスク文学の登場人物として大学生は用いられ、あるいは学生歌の題材として扱われており、相応の研究対象であった。他方で、十九世紀から二十世紀初頭にかけて、学生小説(Studentenroman)の最盛期をむかえ、むしろこの時期にのみ学生小説が創作されたかの印象を与えられるとさえ言われる。<sup>2</sup>このような二つの山に挟まれ、歴史的には大学生の活躍する時期にも限わず、文学における研究対象として大学生に関心の高まることがほとんどなかったという事実は極めて興味深い。

本稿では、ささやかながらこの空白期間を埋めるために、1800 年前後におけるドイツ語圏の文学に登場する大学生の例をいくつか取り上げ、まとめていく。

## 1. エッセイ的な観点から：アイヒENDORF 『ハレとハイデルベルク』(Halle und Heidelberg)<sup>3</sup>(1857)

文学作品における大学生像を取り上げる前に、まず実際の大学生の生活がどのようなも

<sup>1</sup> Vgl. Katarina von Ruckteschell: Gefangene der Freiheit. Frankfurt a. M. u. a. (Lang), 1990, S. 13f.

<sup>2</sup> Ebd. S. 35.

<sup>3</sup> この作品からの引用は、Joseph von Eichendorff. Halle und Heidelberg. In: Sämtliche Werke des Freiherrn Joseph von Eichendorff. – Historisch-kritische Ausgabe, begründet von W. Kosch u. A. Sauer, fortgeführt u. hrsg. v. H. Kunisch u. H. Koopmann. Tübingen (Niemeyer), 1998, Bd. V.4., S. 139 – 181.に拠る。以下、同作品からの引用は(HH 139)と頁数を示す。

のだったか触れておきたい。アイヒェンドルフの自伝的断片に『ハレとハイデルベルク』という一篇がある。1805年から1810年にかけて学生時代をすごした二つの街の雰囲気と大学生の気質についてのエッセイである。この文章の概要についてはすでに石丸静雄の『予感と現在』に詳しい<sup>4</sup>のだが、後で取りあげる大学生像との比較対象として参照する。

まず、当時の学府としての大学の状況について言及されている。アイヒェンドルフによれば、カントの哲学によって世界は、経験的な領域と、凡人には到達することのできない目に見えぬ世界に分割された。その後カントの系譜を継ぐ者たちは、後者のロマン派的世界観、すなわちファンタジーや感情、「きわめて非理性的」(höchstunvernünftig)(HH 140)な領域を徹底的に批判、排除した。これに対し後者の側からも反抗が起こり、様々な方向への志操とそれともなう議論が大学へと集約されたという。

しかし、この哲学的論争と平行して大学において進行していたのは、「ドン・キホーテ並みの奇妙な」(wunderlich und seltsam genug, wie Don Quixote,)(HH 143)姿を見せていた大学生たちの生活である。アイヒェンドルフは彼らの基本理念を、「勇敢さ」(Tapferkeit)(HH 143)であり、「俗物」(Philister)<sup>5</sup>(HH 143)を徹底的に嫌悪すること、と述べている。とりわけハレにおいては、この嫌悪の対象が職人の徒弟に向けられた。徒弟たちは時には学生を避け、時には徒党を組んで学生たちを挑発した。徒弟たちの罵声を聞きつくと、細剣や棍棒をもった学生たちが半裸の姿で通りのいたるところから飛びだしてきて、双方入り乱れてのケンカとなった。

この大学町に変化の兆しを与えたのは戦争の予感だったとアイヒェンドルフは主張している。そこから学生組織としてのオルデン(Orden)が生まれた。18世紀の末期に発生するこの学生組織は、フリーメーソンの影響を受けつつ学生限定の組織として展開していった。その特徴は、家柄や出自などの因習的な狭い考えを乗り越えたヒューマニズム的集団であり、政治的志向はもっていなかった。<sup>6</sup>直接的には関係ないものの、騎士団(Ritterorden)を連想させるその組織では、「騎士小説」(Ritterromanen)(HH 145)に出てくるような、衣装、小道具、装飾に溢れていたという。

しかし、オルデンは厳しい規則によって運営されており、多くの学生はそれに耐えきれず脱落した。この脱落者たちの受け皿の役を同郷人会ランツマンシャフトが果たした。ランツマンシャフトの方は比較的、緩やかな規則しかなく、そこに属した学生たちをアイヒェンドルフは「墮落した」(artete (...) aus)(HH 146)と呼び、彼らが後に、嫌悪の対象だった「俗物」になり下がったと補足している。

その後、二つの集団は互いに主導権を争って激しい闘争に突入する。その際、決闘によっ

<sup>4</sup> 石丸静雄：予感と現在（郁文堂）1973，50～126頁，参照。

<sup>5</sup> 学生言葉。本来は神学用語。十八世紀に意味が拡大し，大学に属さない者全般，さらに俗物的市民(Spießbürger)を意味する語へと変遷した。Vgl. (Hrsg. v.) Kunisch u. Koopmann, a.a.O., Kommentarteil, S. 234f.

<sup>6</sup> 菅野瑞治也：ブルシェンシャフト成立史（春風社）2012，3頁参照。

て生死に関わることも度々あったらしい。この血なまぐさい闘争について、アイヒェンドルフは傑物を輩出したという点では評価しながらも、「無意味で子供じみた」(unnütz und kindisch)(HH 146)行為だったのではないかと後年振り返っている。

アイヒェンドルフの断片から当時の大学と学生の生活について、これ以降、注目すべきと思われる点をまとめた。断片の内容からは、一般にイメージされる当時の〈粗野な大学生〉の姿が浮かび上がる。また、嫌悪の対象だった「俗物」に本人たちになり下がると言及されている点、「無意味で子供じみた」と指摘されている闘争の部分からは、アイヒェンドルフの批判的な態度を知ることができるだろう。

## 2. 作品例 1：レンツ『家庭教師』(Der Hofmeister)<sup>7</sup>(1774)

続いては、レンツの戯曲『家庭教師』を取り上げる。この作品には平行する二つの筋の流れがあり、一つは家庭教師ロイファーとグストヒェンの関係、もうひとつはグストヒェンの最初の恋人フリッツの学生としての生活である。前者が家庭教師と貴族の娘のスキャンダラスな関係を中心に、後者は起伏に富んだ出来事の連続ですすめられ、最後に唐突なハッピー・エンドによって二つの筋が結びつけられる。1800 年以前に発表されたこの作品には、十八世紀前半まで主流だった大学生モチーフの影響が残っている。それまでの、大学生を主要な登場人物とする戯曲や小説では、彼らが「ピカロ」(Picaro)<sup>8</sup>として登場しピカレスク的な出来事と恋愛沙汰の組み合わせによって筋が展開された。<sup>9</sup>

フリッツの遍歴は、彼の最初の勉学の地、ハレの生活が一年ほどすぎたところから始まる。彼の友人ペートゥスの部屋に訪れたフリッツは、学生らしからぬ生活を友人からたしなめられる。

だが、待て、ここにだって女の子は居るだろう。もっと金回りがよかったなら、おまえを今日楽しいところへつれて行くつもりだったんだが。 — おまえがどうであれ、おれにはわからん、ハレに一年居て、まだ女の子と話したことがないなんて。そいつは憂鬱にもなるに違いない、他にありえないだろう。

Aber warte, wir haben hier auch Mädchen; wenn ich nur besser besponnen wäre, ich wollte dich

---

<sup>7</sup> この作品からの引用は、Jakob Michael Reinhold Lenz: Der Hofmeister oder Vorteile der Privaterziehung. In: Werke und Briefe in drei Bänden, hrsg v. S. Damm, München (Hanser), 1987, Bd. 1., S. 41 – 123. に拠る。以下、同作品からの引用は(Hf 41)と頁数を示す。

<sup>8</sup> Vgl. von Ruckteschell, a.a.O., S. 18.

<sup>9</sup> Vgl. ebd. S. 61. たとえば、学生文学を扱ったある研究書の章立てに使われたジャンルは、Schelmenroman, politischer Roman, heroisch-galanter Roman, Schäferdichtung, erotisch-galanter Roman 等である。Vgl. Herbert Nitz: Motive des Studentenlebens in der deutschen Literatur von den Anfängen bis zum Ende des achtzehnten Jahrhunderts. Diss. in Berlin, Würzburg (Triltsch), 1937, Inhaltverzeichnis.

heut in eine Gesellschaft führen – Ich weiß nicht, wie du auch bist; ein Jahr in Halle und noch mit keinem Mädchen gesprochen: das muß melancholisch machen; es kann nicht anders sein. (Hf 62)

このセリフから彼らの生活の一端を垣間見ることができる。ペートゥスからすると盛り場に遊びに行くことも、女を口説くこともしないようでは一人前の学生とは言えない。それを頑なに避けるフリッツと付き合うことを、彼は「おまえと付き合うのが恥ずかしくなるところだ」(ich würde mich schämen, mit dir umzugehen.)(Hf 61)と告げる。他方でペートゥス本人がほのめかしているように、彼はいまや一文無しである。遊びに金を使いすぎたのか、家賃を払ったあと財布に一銭も残らず、上着を質に入れたため外出もままならない。

この二人のペアが『家庭教師』の大学生像の中心である。幼馴染みである二人は、貴族と市民という差があるにもかかわらず、極めて強い関係で結ばれている。この後、ペートゥスの借金の保証人として学生牢にとどまるフリッツは、身代わりなどやめろという助言に対して次のように答える。

彼は僕の級友だった。――彼に構わないでください。僕のほうに彼についての不満がないなら、あなたたちに何の関係がありますか？ 僕のほうがあなたたちよりも長く彼と知り合いなのです。良しと思って僕をここに座らせているのではないことぐらい、わかっています。

Er war mein Schulkamerad – – Laßt ihn zufrieden. Wenn ich mich nicht über ihn beklage, was geht's euch an? Ich kenn ihn länger als ihr; ich weiß, daß er mich nicht mit seinem guten Willen hier sitzen läßt. (Hf 73)

フリッツは頑なさから友人を見捨てることを拒む。この一途さが彼の「責任感ある、寛大な男」([der] verantwortungsvolle[n], großherzige[n] Mann)<sup>10</sup>、「優れた特性を感じさせる」<sup>11</sup>といった評価につながっているのだろう。このようにフリッツが寛大にふるまうことで二人は深い友情で結ばれている。同時に、この二人がそれぞれの行動によって筋を進めていく。

劇中で話を進めるきっかけを作るのはペートゥスである。それは彼がある種の乱暴、粗暴さを持ち合わせているからである。それは最初に引用した会話の直後あらわになる。下宿の女将が二人にコーヒーを提供する。一文無しのペートゥスだが、下宿の家賃としてそれなりの金額を出しているにもかかわらず、彼らに提供されたのは代用の「大麦コーヒー」(Gerstenkaffee)(Hf 64)だと始めて気づく。すると怒りにまかせてコーヒーセットを「窓から

<sup>10</sup> Barbara Becker-Cantarino: Jakob Michael Reinhold Lenz: Der Hofmeister. In: Dramen des Sturm und Drang: Interpretationen, Stuttgart (Reclam), 1987, S. 45.

<sup>11</sup> 平塚 久裕：レンツの『家庭教師』における人物像について（『横浜市立大学論叢』第四十七号，人文科学系列第二号，1996年，3～18頁所収。），10頁。

外へ」(zum Fenster hinaus)(Hf 64)躊躇なく投げ捨てる。この無頓着な行動が彼の粗暴さのきざしであり、さらに無思慮で短絡な行為へと続く。

街に劇団が到着した、と別の大学生が知らせにくると、ペートゥスは観劇に出かけたいと思うが、すでに述べたように上着を質に入れおり、まっとうなコードの衣装を持ち合わせていない。そこで、「狼の毛皮を羽織る」(*Zieht den Wolfspelz an*(ト書き))(Hf 66)と劇場に出かけるといふ突拍子もない行動に出る。服として仕立てていない毛皮など、他人の目に触れればもちろん失笑されるのは避けられない。彼は極めて慎重に行動しなければならないはずだが、目的を果たせないどころか、街をうろついている野犬に追われるみっともない姿を知り合いの令嬢たちに見付かり、侮蔑と嘲笑の対象となってしまうのである。

このような日常的な粗暴さと知的な配慮に欠ける行動をともなつて筋を劇的に動かすが、恋愛沙汰である。フリッツもまた、そのようなやっかい事に巻き込まれる。もちろん、ペートゥスという相棒によってだが。ペートゥスの借金問題を発端として、フリッツとペートゥスはハレを去り、ライブツィヒへと勉学の地を変える。そこで出会ったリュート奏者レーハールの娘にペートゥスが夜這いをかけたことがばれてしまう。フリッツは、清廉潔白を良しとする性格であり、ペートゥスの行為を赦すことができない。ペートゥスは言い訳をするが、フリッツは取り合わない。何よりも、そのことが世間に広まってしまう、相手の立場を悪くしたことがフリッツには赦せない。また、その破廉恥な行為の犯人が親友のペートゥスであり、相手というのがフリッツの師事しているレーハールの娘なのである。

ペートゥスとレーハールがフリッツの部屋に揃うと双方譲らず、最後にはペートゥスがレーハールを殴ってしまう。そしてこの態度が話をさらにこじらせる。力にものを言わせてレーハールを黙らせたペートゥスに対して、フリッツはレーハールに謝罪するようにと主張する。しかし、これは受け入れられず、フリッツはレーハール親子の名誉のためにペートゥスに決闘を申し入れる。ペートゥスの粗暴さとフリッツの純粋さが交錯し、筋が展開していく。そして蛮行のシンボルともいえる決闘の場面へと行きつく。

フリッツ：まず、君から突け。

ペートゥス：(剣を投げ捨てる) おれにはおまえを切りつけることなんてできない。

フリッツ：なぜだ？ 剣を拾いたまえ。僕が侮辱したなら、君の決闘申し込みに応じなければならない。

ペートゥス：おまえは、思うとおり、おれを侮辱すればいい。だが、おれは、おまえが決闘を受け入れることなど必要としてないんだ。

フリッツ：君は僕を侮辱するんだな。

ペートゥス：(彼のほうに走り寄り、彼を抱きしめる) 愛すべきベルク！おまえはおれのことを侮辱する立場にはないといふところで言ったとしても、侮辱だとはとらないでくれ。おれはおまえの心を知っている―そしてその考えが、おれをこの世で最も卑怯な臆病

者にするんだ。俺たちを親友のままでいさせてくれ。悪魔とだって戦うが、おまえとは無理だ。

FRITZ: Stoß du zuerst.

PÄTUS *wirft den Degen weg*: Ich kann mich mit dir nicht schlagen.

FRITZ: Warum nicht? Nimm ihn auf. Hab ich dich beleidigt, so muß ich dir Genugtuung geben.

PÄTUS: Du magst mich beleidigen wie du willst, ich brauch keine Genugtuung von dir.

FRITZ: Du beleidigst mich.

PÄTUS *rennt auf ihn zu und umarmt ihn*: Liebster Berg! Nimm es für keine Beleidigung, wenn ich dir sage, du bist nicht im Stande mich zu beleidigen. Ich kenne dein Gemüt – und ein Gedanke daran macht mich zur feigsten Memme auf dem Erdboden. Laß uns gute Freunde bleiben, ich will mich gegen den Teufel selber schlagen, aber nicht gegen dich. (Hf 100f.)

決闘直前に劇的な和解が成される。ペートゥスは自分の行動を振り返り、非を認めたうえで、レーハールに謝罪する。決闘の場面で二人の和解を導いたのは、フリッツとペートゥスの長年の友情だった。この〈友情〉も当時の大学生の生活においてきわめて重要なものである。『家庭教師』発表時に存在した同郷人会でも、発表後に成立した学生結社においても、会員同士のつながりは欠くべからざるものであり、そのような友情を反故にすれば、互いの名誉を傷つける大きな問題となった。それゆえに、この友情によって決闘の場が治められるという流れは、二人の大学生の和解を通して、戯曲の場に一定の説得力を持たせている。

では、『家庭教師』の大学生とはどのような存在だったか。粗暴さ、野蛮な行為が、さまざまな場面で作品に組み入れられており、恋愛沙汰に見られるように、彼らの激しい気性が、粗暴な夜這いや決闘という場面を導く。しかし、この特徴は戯曲という形式を考えたときに、逆の見方も可能である。すなわち、戯曲を劇的な出来事によって進行させるためには、当時の大学生像は非常に使い勝手がよい人物像でもある。大学生の生活の一部はそれ自体、劇的な場面へと容易に置きかえられる。つまり、劇的進行において大学生は親和性の高い存在でもあるのだ。<sup>12</sup>

---

<sup>12</sup> 実際に、そのように解釈される作品として Christan Reuter: „Ehrliche Frau“(1695)がある。Vgl. Nimtz, a.a.O. S. 194.



### 3. 作品例2：アルニム『ハレとイエルサレム』(Halle und Jerusalem)<sup>13</sup>(1811)

次の作品例はアルニムの戯曲『ハレとイエルサレム』である。17世紀の詩人アンドレアス・グリュフィウスの戯曲『カルデニオとツェリンデ』(1657)を原典として、アルニムによって時代に合わせて書き直された作品と解釈されている。<sup>14</sup>グリュフィウスのオリジナルではイタリアのボローニャが舞台であったが、アルニムの作品では前半の舞台がハレに改められている。また、ナポレオンのライバルであるイギリス軍人シドニーが登場する点、作中の学生が文学作品として『ヴェルター』(Werther)に言及する点などから、アルニムによって改変されたハレの時代は1800年の同時代とみなすことができる。また、原典ではまったく指示のなかったカルデニオの職業が「私講師」(Privatdozent)(HJ 49)になっているように、作品の内容がハレの大学と密接に関係している点も見逃すことはできない。主人公カルデニオは高潔かつ優秀な若者だが、美しい娘オリンピアに惚れこんだことで、苦境へと追いやられていく、という筋である。

作品の前半の舞台ハレは、まさしくアイヒェンドルフが回顧した大学町であり、同時に『家庭教師』でフリッツたちが学生生活を始めた場所でもある。冒頭から複数の大学生が登場するのだが、ここで、ペートゥスの無思慮な態度が再現されたかのような場面がある。市場の店の前でたむろしている大学生たちの前に現れるのは、永遠のユダヤ人アハスヴェールスである。このユダヤ人を見つけた大学生の一人が「そのユダヤ人をからかわないとな」(Den Juden muß ich foppen.)(HJ 50)と言ってラテン語で話しかける。だが、アハスヴェールスにラテン語で返されて、ばつの悪い思いをする。

冒頭のこの短い対話に、大学生の軽率な行動への批判的な筆致を読み取ることができる。ユダヤ人を見て、まずからかおうという態度は、偏見、あるいは狭量を暗示しており、さらに、エリート言語であるラテン語を相手は理解できまいという奢りが含まれている。それを永遠のユダヤ人というモチーフを使うことで批判的描写へと切り替えている。また、『家庭教師』との比較では、ペートゥスの思慮のない短絡な態度とかぶっている。つまり、粗野な大学生という特徴が依然として『ハレとイエルサレム』にも引きつがれているのだ。しかし、アルニムの人物たちは、フリッツやペートゥスとは異なる部分もある。それは登場する学生たちの言動の裏に、雑多な思いのからんだ心理が見え隠れしている点である。『ハレとイエルサレム』の各例を挙げてみよう。

前述の場面の直後カルデニオが登場し、女性との恋愛が話題となる。この場面では、カルデニオが個々の学生と会話をする。パウリンの解釈では、この会話によって顔の見えない一

---

<sup>13</sup> この作品からの引用は、Ludwig Achim von Arnim: Halle und Jerusalem — Studentenspiel und Pilgerabenteuer. In: Dramen von Clemens Brentano und Ludwig Achim von Arnim, hrsg. v. P. Kluckhohn, Leipzig (Reclam), 1938, S. 47–298.に拠る。以下、同作品からの引用は(HJ 47)と頁数を示す。

<sup>14</sup> Vgl. Roger Paulin: Gryphius' ‚Cardenio und Celinde‘ und Arnims ‚Halle und Jerusalem‘. Eine vergleichende Untersuchung. Tübingen (Niemeyer), 1968, S. 11.

様な学生のグループが個性化され、さらにカルデニオが道徳に沿った発言をすることで、他学生に対する優位を保つことができるという。<sup>15</sup>逆に言えば、カルデニオの道徳性によって反射されるかのように、学生たちの発言が、彼らの不安や悩みにはっきりとした輪郭を与えるのである。この会話のなかで、カルデニオは女性を信頼しておらず、人生や自由を女性と交換に購うつもりはない、という。それに対して「孤児院寄宿生」(ein Waisenhäuser)(HJ 55)は、太った家政婦で十分と述べ、「地元学生」(ein Kümmeltürke)<sup>16</sup>(HJ 55)は、商人の嫁との不倫まがいの関係を告白する。孤児院寄宿生の発言が願望なのに対して、地元学生の場合は現在進行しており、より深刻である。この情事について聞いたカルデニオは地元学生に即座にその関係を清算するように命令する。なぜなら、そのような婚姻関係を害するような行動は彼らの属するオルデンの規律に反するからだ。しかし、地元学生の方は煮え切らない態度で答える。

地元学生。けどな、兄弟、俺はあの女とちゃんと別れるつもりだったんだ。けれども、あいつが俺に惚れてて、別れてくれないんだ。

カルデニオ。彼女がお前を思い、お前が彼女を思っていないなら、ことはお前にとって一層ひどいことだぞ。

地元学生。よくわかってるさ。俺はこの生活で何も学んじやいない。何度もずらかろうとしてきたんだ。お前がそう望んでいるからな。今日はずらかって、ラオホシュテットに行くことにするよ。退場

Kümmeltürke. Aber lieber Bruder, ich wollte sie recht gern verlassen, aber sie hat mich gar zu lieb, sie läßt mich nicht.

Cardenio. So schlimmer denn für dich, wenn sie dich hat und du sie nicht hast.

Kümmeltürke. Ich weiß es wohl, ich lerne nichts bei diesem Leben, ich habe so oft mir vorgenommen wegzubleiben; weil du es willst, ich bleibe heute weg und geh' nach Lauchstädt. (Ab).(HJ 56)

カルデニオの命令に対して、地元学生は女が別れてくれないと言い訳をし、結論を出さず、その場を逃げ出す。すでに紹介したように、オルデンの規律の厳しさはすべての学生にとって耐え得るものではなく、この地元学生は脱落する寸前である。高潔な志操と乱れた私生活の矛盾が、二人の会話の中に織りこまれる。

筋は進み、自らの犯した罪を自覚したカルデニオはハレを去ることを決め、オルデンからも脱退するため集会を招集する。アイヒェンドルフが伝えるオルデンの特徴は、「騎士物語に出てくるようなもの」であった。それに沿うかのようにこの場では、暗い部屋と「金色の

---

<sup>15</sup> Vgl. ebd., S. 108f.

<sup>16</sup> 注釈の内容に沿って日本語訳を行った。Vgl. hrsg. v. Kluckhohn, a.a.O. S. 301.



太陽」(eine goldene Sonne)(HJ 149)や、バラのあしらった祭壇(HJ 149)が秘密結社の雰囲気醸成している。

この集會に立ち会う学生の中に、名前のついた人物が二人いる。この二人、キューマンとシュトゥルマーは、カルデニオの緊急招集にしたがって、普段とは異なる集會の様子を會話で伝え、それから近況を話し始める。そこで話題となるのはシュトゥルマーが、なにやら書き物を始めたらしい、という話題である。

キューマン。長い間、一体何をしてたんだ。おそらく、ひっそりと何かを書いてるんだろうけれども。みんな、いぶかしがってるんだぜ。

シュトゥルマー。ほんとうに、ほとんど、どうやってペンを支えるのかも分からない、学問をしようなんて考えも起きやしないんだ。

Kümmernann (...) was hast du denn die lange Zeit gemacht, ich glaube fast, daß du ganz heimlich etwas schreibst, das uns verwundert.

Stürmer. Wahrhaftig nicht, kaum weiß ich mehr, wie man die Feder hält, mich ließen die Gedanken da nicht zum Studieren kommen.(HJ 149)

書き物に熱中するあまりシュトゥルマーは大学での本来の仕事に取りかかることができない。その後、彼は役者たちと付き合うのに時間を費やす。彼のような芸術にのめり込む大学生は、当時決して少なくなかったのは、文学勃興の時代背景から想像できる。

その一方でキューマンは、自分もまた芸術にのめり込んでいたこと、しかし今や、それは彼にとって「無価値に」(unwerter)<sup>17</sup>なつたと告白する。彼にとってゲーテは過去のものとなり、今や芸術に身をまかせることはできなくなった。そして、彼は今自然を研究し始めた。キューマンの述べるゲーテの評価、解釈が当を得ているのかどうか判別するのは難しい。しかし、文学熱から覚めた様子とさらに新たな発見として自然について向き合っている近況が語られる。ここには、文学の熱狂から脱けだした一例が描かれている。

この後、カルデニオはオルデンのマイスターを辞め、オルデンからも脱退すると宣言する。それに対する他の会員たちの態度は極めて陰悪である。彼らのことをこれまで指導してきたカルデニオは、それが本心ではなく建前だったことを補足するからである。当然、その態度を会員たちは赦すことはできない。

キューマン。神よ！カルデニオ、お前はここで死ぬのだ！お前がこれまでわれわれを、ほんの一言のことで、下らぬ違反で跪かせてきたこの場所で！（彼(キューマ

---

<sup>17</sup> 十九世紀半ばのアルニム全集では „un-Werther“と言葉あそびにされている。Vgl. Achim von Arnim: Sämtliche Werke. Berlin: Expedition des Arnimschen Verlags, 1846, Bd. 16. S. 167. In: Zeno.org: Deutsche Literatur von Luther bis Tucholsky, Auswahl und Redaktion v. M. Endres, M. Gödel u. T. Hafki, Berlin (Directmedia) 2005/2007, S. 25591.

ン)は彼(カルデニオ)に向かって剣を突く)(訳注は筆者による)

Kümmerrmann. Sei Gott, Cardenio, du mußt hier sterben, an diesem Fleck, wo du uns oftmals um ein Wort, um kleinliches Vergehen, wie arme Sünder liebest knien. (Er sticht nach ihm.)  
(HJ 153)

キューマーマンを含め、多くの会員はその場を去ったカルデニオを殺そうとして、急いで彼の後を追っていく。今までの侮辱に対してキューマーマンの怒りが頂点に達したのは容易に理解できる。そしてその怒りが剣をとり、相手に襲いかかるという暴力へと駆り立てたのだ。

『家庭教師』での言動と比べれば、『ハレとイエルサレム』の大学生たちには心理の複雑な動きが示されていないだろうか。上着がなければ、毛皮で出かけるペートゥスや、借金の保証人として束縛される労を悩む描写すらないフリッツ、さらには決闘の場にいたってようやく和解を始める二人の姿。『家庭教師』の大学生がその場その場で行為によって筋を展開させていくのに対し、アルニムがつくり出したハレの学生町で、個々の大学生はそれぞれの思惑を吐露している。そこには劇的役を果たす存在以上に、精神をもった人格が浮上してくる。

#### 4. 作品例3：アイヒェンドルフ『予感と現在』(Ahnung und Gegenwart)<sup>18</sup>(1815)

次の例として取り上げるのはアイヒェンドルフの長編小説『予感と現在』に登場する一人の大学生のエピソードである。物語は三部で構成され、それぞれが主人公フリードリヒの「個人的、社会的そして哲学的（あるいは詩的、政治的そして宗教的）」(die persönliche, die soziale und die philosophische (oder die poetische, politische und religiöse) [Sphäre])な領域を描出しているといわれるが、<sup>19</sup>物語の筋を追えば<sup>20</sup>妥当なものだろう。大学生のエピソードが挿入されるのは第一部と第三部にあたる。

若き伯爵フリードリヒは大学での勉学を終え、人生修養の旅に出かけるが、その途中で彼はある劇団と出会い、そこにかつての級友であった男を見つける。フリードリヒがこの男を見つけて「非常に驚いた」(voll Erstaunen)(AG 163)のは、この大学生が決して旅の劇団に身を寄せるような男だとは想像していなかったからだ。

<sup>18</sup> この作品からの引用は、Joseph von Eichendorff: Ahnung und Gegenwart. In: In: Sämtliche Werke des Freiherrn Joseph von Eichendorff. – Historisch-kritische Ausgabe, begründet von W. Kosch u. A. Sauer, fortgeführt u. hrsg. v. H. Kunisch u. H. Koopmann. Stuttgart, Berlin, Köln, Mainz (Kohlhammer), Bd. III, 1984.に拠る。以下、同作品からの引用は、(AG 1)と頁数を示す。

<sup>19</sup> Vgl. Egon Schwarz: Joseph von Eichendorff: Ahnung und Gegenwart. In Romane und Erzählungen der deutschen Romantik., hrsg. v. P. M. Lützeler, Stuttgart (Reclam), 1981, S. 308.

<sup>20</sup> 中村 恵：『予感と現在』と教養小説（大阪市立大学「Seminarium」, 20, 1998年, 21～48頁所収）30～32頁所収。

というのも彼は、その男を当時、物静かで勤勉な人物だと知っていたし、他の学生たちの羽目を外したような行為に対して密かに反発を抱いているような人物だったからだ。 (...)denn er hatte ihn damals als einen stillen und fleissigen Menschen gekannt, der vor den Ausgelassenheiten der anderen jederzeit einen heimlichen Widerwillen hegte. (AG 163)

生真面目な男、という自身の記憶から、旅劇団の中にこの男を見つけたフリードリヒは自分の眼を信じることができなかった。ではなぜ、この男がここに至ったのか。大学町にやってきた見世物小屋にいた少女に惚れ、彼女と結婚の約束をするも、学業を終える前に少女に逃げられてしまう。その醜聞が家族にも学生たちにも伝わり、彼は大学に残ることに耐えられなくなった。その後、少女を追って大学を去り、彼女を見つけた先の旅劇団に身を寄せることとなったのである。

このエピソードについて、注釈には『マノン・レスコー』に出てくる物語を思いおこさせる、と記されている<sup>21</sup>ように、物語としてはありふれたエピソードである。しかし、この大学生の未来にはまったく展開の余地がない。第三部で再び少女に裏切られ、すべてを失った彼は、特別な信条のないまま死を求めて戦場へとやってきてフリードリヒと再々会する。

この破滅的な結末は、最初に再会した際の大学生の発言にすでに暗示されている。両親から見放され、他の学生からは意地悪く笑いものにされた彼は、もはや立ち直ることができず、大学から去り、少女を追うしかなかった。

長い間さまよった後、ついに彼女をこの喜劇団で見つけました。というのは、さっきここから立ち去ったのがその娘です。彼女は私を見つけると、とても喜んで私に飛びついてきました。しかしながら、逃げ出したことについて謝ることもなく、そもそもほんのわずかにも間違ったことだとは思ってもいないようですが。—母は、その後悲嘆に暮れて死にました。自分がいかに愚か者かは分かっています。でも他にどうしようもないんです。

Nach langem Irren fand ich sie endlich bey diesen Komödianten wieder, denn es ist dieselbe, die vorhin hier weggegangen. Sie kam sehr freudig auf mich zugesprungen, als sie mich erblickte, doch ohne ihre Flucht zu entschuldigen oder im geringsten unnatürlich zu finden. – Meine Mutter ist seitdem aus Gram gestorben. ich weiß, daß ich ein Narr bin und kann doch nicht anders. (AG 164)

彼は少女を見つけたが、彼女のほうはもはや彼を愛してはいないだろう。彼を裏切って姿を消したにもかかわらず、彼女はそのことを謝罪もせず、良心の呵責も感じてはいない。彼女にとってこの若者は都合のよい相手でしかない。大学生のほうでも、そのことにおそらく

---

<sup>21</sup> Vgl. Anmerkungen. hrsg. v. Kunisch u. Koopmann, Bd. III., a.a.O. 465.

気づいているはずである。しかし、いまや大学に戻り、元の生活を取り戻すことはできない。自分のことを「愚か者」だと認識してはいるが、それを修正するような手立ても、能力も彼の手には残されてはいない。

このエピソードに登場する大学生は、アルニムの戯曲に登場した大学生たちとは対極の道を進む。彼は粗野な大学生たちの「ばかげた行動」とは距離を置き、真面目に学業を全うしようとした。少なくともその点では勤勉な大学生だろう。あるいは、アイヒェンドルフにとって人間の自由とは「市民社会のすべての抑圧と制限、その現れの一つとしての『常識』化した価値観からの自由を意味する。『さすらうこと』はその象徴的表現なのである」<sup>22</sup>という解釈から考えれば、少女を追いかけたこの大学生もまた、主人公フリードリヒと同様にまさに自由な人間として振る舞っていると言えるかもしれない。

だが、ただわき目もふらず大学の中で生きていくことが、彼の力となるかどうかは実は定まっていない。大学での勉学と生活のための力の一つにまとまったものではないからだ。そのように考えると、彼の人生を狂わせたのは、彼の心を欺いた少女だけではない。恋愛の中で視野狭窄に陥り、根拠なく少女を追求めた頑迷さと、安定的にパンを享受する生活力のない彼は「愚か者」であることを理解しても、もはや自分を取り巻く流れから逃れることはできない。

この大学生の絶望的な状況に対して、フリードリヒの友人レオンティンは、必ずしもこの状況から抜け出すことが救いになるとは限らず、下手をすると破滅に陥るかもしれないと助言する。しかし、それでもなお、この若者が将来に何も見通さずただ生きていることに警句を発する。

だが、君はよりたくましくあらねばならない、と彼（レオンティン）は大学生に言った。  
なぜなら世間は厳しく、たくましくあらねば君を恥辱へと追いやってしまうからね。  
(訳注は筆者による)

Aber härter müssen Sie seyn, sagte er zu dem Studenten, denn die Welt ist hart und drückt Sie sonst zu Schanden. (AG 164)

この大学生にとってこの警句が困難であろうと、彼自身がそのように生きていかねば、今のままではやはり破滅が待っている、とレオンティンは警告する。大学生自身は自覚してはいないが、それほど危うい状況に彼はいる。しかし、実際にはこの警告が活かされることはなく、少女に一身をあずけ、その相手がなくなると、大学生は死へと身をまかせる。知的な行動力を捨て、絶望という感情にただ身をゆだねるだけである。結局、「ばかげた行動」と

---

<sup>22</sup> 桑原 聡：自由を求めて——アイヒェンドルフにおける「さすらうこと」の意義について——（西田越郎先生退官記念論集刊行会「西田越郎先生退官記念ドイツ語文学・語学論集」，1985年，51～61頁所収）57頁。

は対極に進んだ先もまた空疎で無知と思われる態度に行き着いてしまったのだ。

#### 5. 作品例4：アイヒENDORF『のらくら者の生活』(Aus dem Leben eines Taugenichts)<sup>23</sup> (1826)

アイヒENDORFの作品からもうひとつ『のらくら者の生活』を取り上げる。『予感と現在』とは対照的に明るく楽しい雰囲気作品である。この物語の結末近くでヴィーンに帰ってきた主人公は、旅の楽団と思しき一団と出会う。彼らは休暇中にプラハの大学からやってきた貧乏学生たちの一団である。作品の雰囲気と同様、彼らも底抜けに明るく楽天的で人懐こい好人物として描かれている。

彼らは、前述の大学生と異なり、世慣れた様子で休暇を過ごす。もちろん「日々勉強にいそしむ」(so studieren wir von einem Tage zum andern fort)(LT 177)ことを欠かすわけでもない。また、聖職者としてどんな農民でも改心させられるような「立派なやつら」(die rechten Kerls)(LT 178)になると希望に満ちて語る。少なくとも、絶望に振り回され自暴自棄になるようなことはなさそうである。

しかしその一方で、彼らの計画性のない思いつきと、それにあわせた行動は必ずしも洗練されているわけではない。休暇の最後の宿を求めて親戚を頼ろうとする彼らが、身だしなみを整えようとする行動は、かなりぞんざいなものである。

それに対して学生たちは、急いで離れた茂みへと歩いていき、そこで急いでコートををはたき、そばを流れている川で体を洗い、次々と入れ替わりひげをそるつもりだった。

Die Studenten dagegen wanderten eifrig nach einem abgelegenen Gebüsch, wo sie noch geschwind ihre Mäntel ausklopfen, sich in dem vorüberfließenden Bache waschen, und einen rasieren wollten.(LT 186)

懐の乏しい彼らとしては精一杯の行動かもしれない。しかし、彼らの行動はどこか滑稽さを含んでいる。それは、彼らの知的な領分よりも、世間ずれした、たくましい生命力が振りまく図太さのうちに潜んでいるもののようである。だが、この学生像は物語の時代設定とは必ずしも一致しない。作品内の時代は発表時と同時代だろうと指摘されている。<sup>24</sup>つまり

<sup>23</sup> この作品からの引用は、Joseph von Eichendorff: Aus dem Leben eines Taugenichts. In: Sämtliche Werke des Freiherrn Joseph von Eichendorff. – Historisch-kritische Ausgabe, begründet von W. Kosch u. A. Sauer, fortgeführt u. hrsg. v. H. Kunisch u. H. Koopmann. Tübingen(Niemeyer), Bd. V.1., 1998, S. 83–197.に拠る。以下、同作品からの引用は(LT 83)と頁数を示す。

<sup>24</sup> 横溝 眞理:『タウゲニヒツ』とその時代批判の諸相(上智大学大学院「STUFE」第6号, 1986年, 65～83頁所収)71～72頁参照。

1820 年を過ぎてメッテルニヒ主導の反動政治に対し学生たちの不満が募り、自由を求める渴望が強くなったブルシェンシャフト運動の時期であることを考慮すれば、ここに登場する大学生たちはあまりに素朴で牧歌的であり、むしろ時代を超越した、アイヒェンドルフのイメージの中の大学生像と捉えられるべきかもしれないのである。

## 6. まとめ

レンツの『家庭教師』、アルニムの『ハレとイエルサレム』、アイヒェンドルフの『予感と現在』、『のらくら者の生活』に登場する大学生の描写についてそれぞれ取り上げ、どのような人物として描かれているのか検証した。

『家庭教師』の大学生は、それ以前の文学によく用いられた大学生のモチーフ、あるいは大学生文学の構造に比較的強く影響されている。粗野な大学生ペートゥスと徳深い大学生フリッツ、双方がもみ合いながら作品の筋を進める役割を果たしている。

『ハレとイエルサレム』の大学生たちは、粗野な大学生をモデルとした若者たちだった。彼らは、アイヒェンドルフの自伝的な文章に記された大学町で生活するものたちを髣髴とさせる。その一方で『家庭教師』に登場する学生よりも、心理的な言動が増えている。

『予感と現在』で語られる大学生のエピソードは、典型的とも言える転落する大学生の物語であった。ただ勉学にいそむだけでは社会で生き延びることはできず、最後には絶望し死を選ぼうとする。

『のらくら者の生活』に登場したプラハの大学生たちは、楽天的な若者たちであった。彼らは教養も、世間で生きる図太さも兼ね備えているが、それでも滑稽な印象をぬぐえない。それは、生活の中での彼らの厚顔無恥な部分の持つ生命力が放つものではないか。この楽天的性格は時代性よりもむしろ一種の理想的学生像を示している。

彼らに共通するのは、理性的、知的な側面をほとんど期待されていないことである。それぞれに性格や状況は異なるものの、感情に流される激しい性格が表出される。この傾向は、以前の大学生像が主にピカロ役として振る舞っていたという指摘と比較した場合、大きな相違はないといえるだろう。その一方で時代背景として、十八世紀にはすでに大学改革始まっていたにもかかわらず、その影響はあまり感じられない。大学という知の学府で培われるべき理性的、知的な振る舞いの描かれることは極めて少ない。1800 年前後の作品において、大学の歴史上の変化は注目されていないのである。さらにその後、十九世紀に隆盛をむかえる学生小説においても事情はあまり変わらない。歴史的には、ケンカと宴会しかない、と評価された<sup>25</sup>学生組織が幅をきかせていたのと同時に、小説においてもコアに代表される学生組織をモチーフに構成された娯楽性の高い作品が中心だった。<sup>26</sup>時代背景や生活状況

<sup>25</sup> Vgl. Konrad H. Jarausch: Deutsche Studenten 1800-1970. Frankfurt a. M. (Suhrkamp), 1984, S. 49.

<sup>26</sup> Vgl. von Ruckteschell, a. a. O. S. 28f. u. S. 57.



による差異はあれど、理性的、知的な大学生が文学上で扱われるのは極めて例外的と言うほかない。

しかし、これは 1800 年前後の作品における大学生像が、その前の時代、あるいは後の時代の学生像と同様、あるいは区別に値しないというわけではない。その際、フォン・ルクテシュェルの指摘する、十九世紀の写実的理論の登場と文学研究において大学生への関心がなくなるという奇妙な一致<sup>27</sup>は、重要な手がかりになるのではないだろうか。この当時、市民社会が拡大するのと平行して、大学という組織は市民社会の方へと接近せざるを得なくなった。もはや大学は陸の孤島ではなく、大学生もまた局外者というよりは市民社会の一員へと移行していく。この過程で、大学生のもっていた特有な個性は弱まっていったと考えられる。そしてその影響が、文学作品にも波及したと推測できるだろう。そのような状況において、文学における大学生像は社会における新たな接触、摩擦を経験し始める。本稿で取りあげた作品の場合、『家庭教師』の大学生に比べてその後の三つの作品では、大学生の心理、あるいは生活の背景がより複雑で重層的に描かれ、社会の中での彼らの多様な立ち位置を示している。また、作品ごとに大学生の振る舞いや個性にも相違があり、そこに、それぞれの作家のもつ関心が投影されていると考えることもできるだろう。つまり、1800 年前後の大学生像は、その時代をまたぐ学生小説などで盛んに用いられた形式的な姿からは離れて存在しており、それによって、この大学生像は市民社会のなかで起こるさまざまな場面、様相を映し出すことのできる独自性を獲得したと言えるのではないだろうか。

---

<sup>27</sup> Vgl. von Ruckteschell, a.a.O., S. 18.

## Die Figur des Studenten in der deutschen Literatur um das Jahr 1800

OZAKI Hajime

In diesem Aufsatz geht es um Figur des Studenten in der deutschen Literatur um das Jahr 1800. Zunächst kann man feststellen, dass die Literatur über Studenten bis etwa 1750 in Fachkreisen nur wenig behandelt wurde. Aber besonders in Bezug auf das 19. Jahrhundert wird das Thema Student „ausgespart oder [ist] zumindest nur sehr dürftig vertreten“. Andererseits erreicht der Studentenroman vom 19. bis zum beginnenden 20. Jahrhundert, besonders nach dem „Vormärz“, einen Höhepunkt. Diese wissenschaftliche Lücke der Zwischenzeit ist auffällig. Deshalb habe ich im vorliegenden Aufsatz Studentenfiguren aus literarischen Werken um 1800 gewählt und interpretiert.

Im Lenz' Drama „Der Hofmeister“ spielen der leichtsinnige Student Pätus und der großherzige Fritz, die unter dem Einfluss der Vorstellungen stehen, die sich das 17. u. 18. Jahrhundert von den Studenten machten, eine handlungsleitende Rolle.

Die Studenten in „Halle und Jerusalem“ sind relativ grob und wild, aber sie werden stärker mit psychischen Bewegungen geschildert, als es im „Hofmeister“ der Fall ist.

In Eichendorffs Roman „Ahnung und Gegenwart“ tritt ein Student auf, der dem Klischeebild entsprechend fleißig ist, aber – ebenso typisch – durch die Liebe herabgezogen wird. Der Erzähler deutet an, dass es eine Kluft zwischen Studium und täglicher Arbeit gibt.

Die Prager Studenten von „Aus dem Leben eines Taugenichts“ sind lebenslustig und optimistisch, aber sie passen nicht in das in der Erzählung beschriebene Zeitalter, sodass man vermuten kann, dass sie mit idealisierenden Vorstellungen Eichendorffs gestaltet wurden.

Den Gestaltungen dieser Studenten ist gemeinsam, dass sie niemals das vernünftige Benehmen an den Tag legen, das eigentlich an der Universität gefördert werden soll. Und im Vergleich zum „Hofmeister“ werden psychische und soziale Hintergründe komplexer und vielfältiger beschrieben. Dies scheint der Grund „für den Abbruch der Studien zum literarischen Studenten (...), der auffälligerweise mit dem Aufkommen realistischer Theorien zusammenfällt“: vor dem historischen Hintergrund ist zu verstehen, dass die Studenten um das Jahr 1800 den Außenseiter-Charakter gegen das Bürgertum reduzieren und sich der Gesellschaft annähern. Dabei bekommen die literarischen Figuren zugleich einen vielfältigeren und spezifischeren Charakter, als dies in früheren und auch in späteren Studentenromanen der Fall ist.